海月になる日

二葉一葉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
海月になる日

【Ｎコード】
Ｎ２０６４Ｊ

【作者名】
二葉一葉

【あらすじ】
水族館は苦手。でも、動物園じゃなくてよかった。
まるでここは海の中。呼吸の仕方がわからない。
お互いに好意をもってる女の子と男の子のお話。

海の月『女の子』

水族館って苦手。
厚いガラスの水槽に目が回る。
魚たちの目はぎょろぎょろしてるし、口はポカポカと開いてる。
グロテスク。
あたしには、そう見える。
「この熱帯魚、かわいい～。」
隣の女の子がそう言ってはしゃいだ。
菱形で、モノトーンのシマシマ。
どこらへんがかわいいんだろう？
あたしは理解できないたいした疑問でもない疑問に頭をひねりながら、先へ進む。
淡水魚、熱帯魚、深海魚・・・
ぐるぐる、廻る、廻る、廻る。

「どうかした？」

海の底へ沈んでいきそうだったあたしを引き上げる声。
「気分でも悪い？」
心配顔でのぞき込まれて、あたしは慌てて顔を振る。
「なら、いいけど。」
呟いて、彼は先のブースへ歩いていく。

口を開いたら、言葉よりも早く、心臓が飛び出してしまいそうだった。
水族館で、よかった。
動物園なら真っ赤な顔をごまかせない。

目で追っていた彼が、ゆっくり振り返って、あたしは飛び跳ねそうになった。
「来ないの？」
その言葉に返事はない。
あたしへの、言葉。
右足、左足、右足・・・。
ゆらゆらと水面を歩いているみたい。
あたしは彼の方へ、返事もしないで、近づいた。

筒状の水槽がぽつぽつと置かれてる空間はひっそりとしていた。
みんなはまだ熱帯魚に夢中なのかな。
心臓の音だけが、うるさくて、止まってしまえ、と思った。
「クラゲって綺麗だな。」
水槽は青く、クラゲは光る。
シルクのドレスに身を包んで、軽やかに、優雅に水中を踊ってる。
うん。キレイ・・・。
彼とあたしは、ずっとひとつの水槽でひとつのクラゲを眺めてた。
漂うクラゲはまるで海に浮かぶ月のよう。
「クラゲって、海の月、なんだって。」
心臓が、跳ねる。
同じものを見て、同じことを思う。
それが嬉しくて、泣きそうになった。
あたしはそっとガラス越しに彼を見れば、僅かに目尻を下げてる彼と目があった。
溺れそうな錯覚に、あたしは素速く視線を逸らす。
ガラスに映る、おかっぱ頭のあたしは幸せそうな顔をしてる。
「クラゲみたい・・・な、頭、だよな。」
クスクスと楽しげな声が落ちてきた。
「・・・ヒドい。」

嘘。全然、ヒドくない。
さっきからあたしは、ふわふわゆるゆる、しているのだから。
ふわふわ、ゆるゆる、ふわふわ、ゆるゆる・・・。

「好きだ。」

ガラスの中のクラゲは、キュッと体を細くして、上昇した。
あたしは隣を、グッと見上げた。
心臓がキュッと縮んで、熱い血液が全身を波打って流れる。
その勢いできっとあたしはいま、浮いている。
彼は真っ直ぐクラゲを眺めてるから、浮いてるあたしに気づいてない。
「クラゲ、が？」
そうだと言われたら、あたしは急降下してそのまま海の藻くずになると思う。
思う、けど。
けど、でも、もし、もしも、違ったら・・・？
ゆっくりと重なった視線に、今度は逸らせられなかった。
ああ、どうしよう。
ついにあたしの心臓は止まるのかな。
でも、どうか、あと少し・・・。
ふわふわとあたしは浮いて、どんどん彼に近づいていく。

「アンタが、好きなんだよ。」

その優しい瞳に、クラゲのように揺らめいてるあたしが映ってた。

海の月『男の子』

熱帯魚がかわいいと騒いでる女子たちを横目に、彼女はふわふわとした足取りで奥へ奥へと進む。
水中を漂うように、静かに動いてる。
ついて行ってるのか、それとも引き寄せられてるのか。
どっちだろうといいんだけど、オレが後ろを歩いてることに彼女は気づいてない。
ふっと、一瞬だけ、ほんの一瞬、彼女の足が止まったように見えた。
気づいた？・・・違うか。
振り返ることもなく、彼女はまたゆっくりふわふわと歩き始める。
彼女が向かう先は、クラゲコーナー。
なるほどね、熱帯魚よりクラゲが似合うな。なんて、少し笑った。
彼女は引き込まれるように薄暗い方へ入っていく。
その様子が、少し、変だった。
ふわふわ、より、ゆらゆら？
「どうかした？気分でも悪い？」
今にでも倒れそうに見えた小さな後ろ姿に、オレは早足に近寄った。
ビクリと体を縮ませて、潤んでるようにもみえる大きな瞳がオレを映す。
彼女はキュッと唇を結んで、顔を横に振った。
顎ラインで切り揃えられた髪の毛が艶やかに動く。
「なら、いいけど。」
大丈夫なら、いい。
変に心配してしまったことと、オレだけを見る彼女の瞳に、自分の顔が赤くなったのがわかった。
気づかれないように、彼女に背を向けて、そのままクラゲコーナーに入った。

薄暗い中、円錐の水槽でクラゲが涼しそうに浮遊してる。
ひんやりとした空気が、頬の熱をさらう。
変に思われたか？大丈夫、だよな？
チラリと後ろを見れば、彼女は立ち止まっていた。
入ろうかどうしようか、迷ってるようにこっちを眺めてるみたいだった。
さっきまでこっちに歩いてたのに。
オレのせい？
「来ないの？」
立ち止まって、振り返る。
普段なら、こんなことは絶対言わない。言えない。
なのに、高鳴ってる鼓動がやけに苦しくてしかたがない。
まるでここは海の中。
呼吸の仕方がわからない。
オレの言葉に、彼女がゆらりと歩き出したのを見て、オレはクラゲの水槽に視線を移した。
目の前で、ゆらりと青いクラゲが動く。
優雅に、気品にクラゲは揺らめく。
・・・クラゲだ。彼女は、クラゲに似てる。
「クラゲって綺麗だな。」
小さく頷いた彼女は、オレのすぐ、隣にいる。
ゾクリ、とした。
水槽の青白い光に溶けて消えそうなほど綺麗な彼女に、オレは言葉を失った。
声も、指先も、呼吸も、瞬きも、すべて。
彼女は綺麗だ。
そんなオレを、クラゲは青く光って優しく笑う。
「クラゲって、海の月、なんだって。」
昔、そんなことを聞いたことがあったを思い出す。
ガラス越しに見る彼女は、クラゲを見て、微笑んでる。

”舞い上がってる”のは、オレと、この水槽のクラゲだけ、か。
「クラゲみたい・・・な、頭、だよな。」
まさか”彼女自身が”綺麗だ、なんて言えない。
白々しく”頭”が、なんて言葉にしたら、本当にそう思えて、思わず笑ってしまった。
「・・・ヒドい。」
そう言い返してきた彼女は笑っててて、それはこそ痒くも嬉しそうな表情に見えた。
その彼女の笑顔に、小さく生まれた期待。
勘違い？自意識過剰？ただの、欲望？
だけど生まれてしまった期待は、打ち消すどころか、オレのすべてを飲みこんでいく。

ずっと持っていた彼女への想い。
このままずっと、持ち続けるだけだった気持ち。

「好きだ。」

魔法の言葉のようだった。
息苦しさえ感じたこの場が、優しいものに変わったように思えた。
その言葉はクラゲにまで聞こえて、クラゲはばつが悪そうに慌てて泳ぎ出す。
「クラゲ、が？」
彼女の震える声で、オレまで震えそうだった。
オレも初めて見る、驚いた顔の彼女に、笑おうとしても、上手くできない。

不安と後悔の小さい泡が弾けて、一瞬彼女の問いに頷きたくオレが生まれる。
もう一度。
ちゃんと、彼女に。
「アンタが、好きなんだよ。」

ふわふわ、ゆらゆら、ふわふわ、ゆらり。
オレは、海の月を壊さないように、触れた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2064j/

海月になる日

2010年10月15日22時05分発行